むなかた

長月（ながづき） 第679号

目次

宗像国際環境100人会議 3·2
秋季大祭 4
沖ノ島祭祀 5
神宝館だより・造営日記 6
宗像大社歌会詠草 7
御造営奉賛者御芳名 7

よって！ 近年、御朱印が大ブームになっている。当社でも土日ともなれば朱印書きに追われ、人が張り付かなければならない程だ。最近の風習のように思われるが、起源は諸説あり室町時代からなどと様々言われている▼江戸初期には納経帳というものがあり、これは寺社へお経を納めた事を証明する一種の証明書であった。もともと神社には御朱印が無く、神仏習合の時代に神社へ納めた納経帳の朱印をその神社を管轄している別当寺と呼ばれる役職を担った寺院が押印していた▼明治時代より神仏習合が廃止され納経も禁止となるも、寺社を巡りその証明を頂くことが広く親しまれていたため、印を頂く風習が残り現在のように「納経の証の印」ではなく「参拝し神様との御縁を結ぶ証の印」として独自で押印するようになった▼今では若い人も朱印帳を持ち、これが神社参拝の契機となっており、斯界にとっては、喜ばしいことである。ただ一方では、朱印集めが主になり、参拝しなかったり、代理で受けられる方も一部いるように感じられる▼「神様との御縁を結ぶ印」「参拝の証」であることを理解して御朱印集めをして頂ければと思う。（舩）

海の鎮守の森構想
大いなる海 生命の循環

第37回 全国豊かな海づくり大会福岡大会協賛行事
第4回 宗像国際環境一〇〇人会議

❶開幕・小川洋福岡県知事より来賓挨拶❷大人と子供が協力して作った竹漁礁（フィールドワーク＝鐘崎漁港）❸初日、各分野の第一人者の方々によるシンポジウム❹海岸の漂着ゴミ清掃、この日は家庭用の冷蔵庫が漂着していた（フィールドワーク＝さつき松原）❺黒田玲子氏による特別授業（分科会）❻最終日、漁師・歌手・料理人・冒険家など業種を超えたシンポジウム❼高校・大学生による環境セッション（分科会）

〝海の鎮守の森〟構想を掲げ、海藻などが枯れていく〝磯やけ〟問題や海岸に流れ着く漂着ゴミなど海の環境保全に取り組む「宗像国際環境100人会議」。本年は十月二十九日に宗像市において開催される「第37回全国豊かな海づくり大会福岡大会」の協賛行事として行なわれた。

四回目となる今年は〝大いなる海生命の循環〟をテーマに八月二十五～二十七日に宗像市・福津市で開催され、国、県、市、環境問題に取り組む企業、市民団体、漁業者、地元の中・高・大生など三日間で七百名を超える参加を得た。

初日は「南極」「PM2・5」「マイクロプラスチック」の取材に関わったジャーナリストが世界の環境現状を映像で紹介。世界規模で進む環境破壊の実態を知ることからスタート。地元鐘崎の古老の漁師達や、各界の第一人者のシンポジウム。二日目には恒

第4回 宗像国際環境100人会議　宗像宣言2017

地球環境問題が深刻化する中、宗像国際環境100人会議では、今日の地球環境を把握するため、「南極」「PM2.5」「マイクロプラスチック」の取材に関わったジャーナリストからの情報を共有し、人類が引き起こしてきた環境破壊の実態をあらためて認識した。

ここ宗像の地は森里川海にも神々が宿るとして、畏怖畏敬の念をもって自然と共に生きてきたが、近年の地球規模による環境破壊により、この豊かなる地においても目に見える変化が生じはじめている。

特に宗像三女神を護ってきた宗像海人族の末裔たちの海では、温暖化による海水温の上昇により魚種が変化し、磯焼けが起こり、さらに大気汚染によって海そのものも汚れつつある。

私たちはこのような状況から少しでも脱却するため、「海の鎮守の森構想」を掲げ、学識者や実践家をはじめ地元漁業従事者及び子供たちとともに、昨年より竹漁礁を海に沈め、海辺の漂着ゴミ拾いなどを実践しているが、今日の環境の変化はさらにスピードを増し、早急なる対応が必要との結論に至った。

国際社会における地球環境問の認識は深まりつつあるものの、未だに一時的な事象との世論があることは否めない。しかし宗像の海の環境は明らかに悪化の一途を辿っている上に、海には国境がないため国際的な連携が必要とされるが、そのためには先ずは個々の価値観の転換からはじめなければならない。

奇しくも宗像においては、本年10月29日、第37回全国豊かな海づくり大会が開催される。水産資源の保全と改善を目的とした本大会は、海洋国家としての素晴らしい取り組みである上に、宗像国際環境100人会議においては、これを契機に「海の鎮守の森構想」をさらに進めることによって、国内外にこの活動の輪を広げてゆくことをここに宣言する。

平成29年8月27日　第4回 宗像国際環境100人会議参加者一同

5

6

7

例のフィールドワークで竹漁礁作りや海岸清掃、東京理科大学教授黒田玲子氏による特別授業や地元環境団体と企業、大学生と地元高校生によるワークショップなどを行い、三日目は場所を福津市のカメリアホールに移し、環境考古学者安田喜憲氏の基調講演や、市民公開シンポジウムなどがあり、最後には宗像宣言を発表し幕を閉じた。

海を隔てた三宮で成り立つ当社では、未来に豊かな自然を守り伝えるべく、この環境会議に、開催当初より全面協力している。日々加速する環境悪化に歯止めを掛けるべく、世界遺産の地域としても注目される宗像から、この会議での海の環境再生の取り組みを、国内は基より世界に発信し続けて行かなければならない。

宗像国際環境100人会議
https://munakata-eco100.net/

秋季大祭 ――十月一～三日に亘り斎行――

十月一～三日に亘り恒例の秋季大祭が斎行される。この秋季大祭は正確には【一日・辺津宮入御祭（みあれ祭）】【二日・例祭】【三日・秋季総社祭】に区別される。

一日の「みあれ祭」は、中世に行われた長手神事を昭和三十七年に再興したものであり、「長手（ながて）」とは「長妙（ながたえ）」で長い布を竹の旗竿に附したもので、沖ノ島からこの長手を宗像の神の象徴として辺津宮に迎え、祭を営むものである。古来は春夏秋冬の年四回行われていたものを、江戸時代には夏・冬の二回に変更された例にならい、秋一回として、当社の例祭（最重儀）が二日であることから、その前儀としてこれを行う事とした。またその祭儀名を「みあれ祭」としたのは「神のみ生（あ）れ」、即ち宗像大神の御神威の一層の発現を祈求する意味で出たものである。

秋季大祭全体と同義に認知されている感のある「みあれ祭」は、三宮の御神璽が海・陸を神幸し辺津宮に入るまでであり、最重儀は前述の通り二日の例祭である。

『正平年中行事』にみえる当宮の「大祭神事」と称するのは三月・九月の「御長手御鍛冶屋御入神事」、六月の「御長手神事」の前に行われており、いずれの大祭神事も沖ノ島の神の象徴である御長手を奉戴する祭の前儀として行われていた。

終戦までの例祭日十一月十五日は、宗像祭の日であり、これは一條兼良の『公事根源』に「十一月上卯日、宗像祭、氏人これを行ふ」とみえ、室町時代に中央にまで聞こえた祭事であったが、戦後、中世以来の放生会大祭の変化した日であった十月二日を取り上げたものである。

本年「平成ノ大造営」の改修等の諸条件が整ったことから「みあれ祭」の陸上神幸行程を一部変更し、輦台（神輿）のまま辺津宮への宮入がなされる。

みあれ祭・海上神幸

陸上神幸

沖ノ島祭祀 2

宗像にます女神（二）
―三女神と自然環境―

國學院大學　神道文化学部教授　笹生 衛

平成二十九年七月、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」は、一括して世界遺産へと登録された。宗像の神祭りの場に、人類が後世へと伝えるべき普遍的な価値が認められたわけである。では、その神祭りの意味と価値とは、どのようなものなのだろうか。

そもそも宗像三女神を含め、古代日本の神々は、いかに考えられていたのか。これを示すのが、『古事記』『日本書紀』（以下、『記紀』）にある「ます神」という表現である。宗像三女神は、『記紀』では、「沖津宮（遠瀛）」（おきつみや）、「中津宮（中瀛）」（なかつみや）、「辺津宮（海浜）」（へつみや）に「坐（居）」（ま）す神と書かれている。「坐・居（ま）」すとは、「特定の場所に居られる」という意味。つまり、宗像の女神は、『記紀』が編纂された八世紀初頭、沖津宮＝沖ノ島、中津宮＝大島、辺津宮＝釣川河口の海辺に居られる神々と考えられていたのである。

古代日本の中心、大和地域（奈良県の奈良盆地）と朝鮮半島とを、最短で結ぶ航路を考えると、宗像三女神が「ます（居られる）」これらの場所は重要な意味を持ってくる。釣川河口は船を停泊させる港湾の働きを果たし、大島・沖ノ島は、九州と朝鮮半島の間を海上で中継する場所にある。特に、沖ノ島は、激しい潮流が逆巻く玄界灘のただ中にあり、しかも人間の生命維持に不可欠な真水が湧く。古代、命をかけて玄界灘を渡った人々にとって、この場の自然環境の働きは、特別なものと感じられたはずである。

近年、神の考え方は、人間の脳の直観、認知と深く関係するという研究が発表されている。自然環境の特別な働きに、それを起こし司る存在を直観的にイメージし擬人化する。これは人類が進化の過程で得た脳の認知の働きであるというものだ。日本列島の自然は、山・川・海などの恵みが豊かな反面、多くの災害をもたらす。その働きの背後に直観的に神をイメージし、貴重な品々を捧げ、ご馳走を供える「祭り」（まつり）を行い、豊かな恵みを願うと同時に、自然がもたらす災害を防ぎ鎮めたのだ。ここに日本の神祭りの本質があり、神祭りが日本列島で連綿と伝えられてきた理由がある。だから、特別な自然環境の働きが現れる場所に「神はます（居られる）」と考えられ、そこで祭りは行われたのである。

玄界灘の自然環境の働きを象徴する宗像三女神への信仰と祭りは、このような人間と自然の関係を具体的に示すものである。自然と人類との共存が問題となっている現代においても、そこには普遍的な価値があるといってよいだろう。そして、その古代の神祭りの姿を、現代に伝えるのが沖ノ島の「祭祀遺跡（さいしいせき）」なのである。

神宝館だより 6
八万点ノ国宝収蔵

世界遺産正式登録決定直前、雨降りの七夕、所蔵者の御奉納によって文献史料一点が当社の御神宝に新たに加わった。『宗像記追考』全五冊である。この史料は、先立って成立した『宗像記』を補足・訂正して書かれたもので、成立は元和三年（一六一七）、作者は最後の宗像大宮司氏貞の家臣であった占部貞保である。宗像大社の御由緒、大宮司家の始まりから筆を起こし、氏貞の大宮司就任にまつわるお家騒動である菊姫様殺害一件や、戦国乱世にあって大宮司氏貞がいかに宗像大社と領地を守り抜いたかを克明に書き記している。作者晩年の著作であり、必ずしも正確な記述ばかりではないが、大宮司氏貞と同時代を生きた人物による記録として史料的価値は高い。今回御奉納いただいた『宗像記追考』は原本ではないが、成立から程遠くない時期に書写された善本である。またこの写本にのみ、弘治三年（一五五七）に焼失する以前の宗像大社境内の様子を描いたとされる古絵図が含まれており、中世史研究者の中ではよく知られていたものである。

この写本は作者の占部家ではなく、同じく大宮司氏貞の家臣であった力丸家に伝えられてきたもので、両家のやりとりの経緯は全く不明である。大宮司氏貞の病死によって宗像家は断絶、追討ちをかけるような豊臣秀吉による宗像大社社領の没収。家臣の困窮は容易に想像できる。その中で四百年という長い時間の中に埋もれさせてしまうことなく、何代にもわたって大事に伝えられてきたこの史料を、現在の私たちの手元に託していただいたことに深く感謝すると共に、重い責任も託されたことを胆に銘じたい。

（河）

『宗像記追考』

宗像大社古絵図

時満ちて道ひらく 造営日記 36
～勅使館竣工間近～

本年二月に着手した勅使館新築工事は、外装・内装ともに姿をあらわし、いよいよ竣工間近となった。以前の勅使館と比べると、床面積は十坪ほどしか広くはなっていないが、高さのある屋根や広縁を設けたことにより、重厚感のある建物となった。

内装では、顔となる玄関広間に工夫を凝らし、来客者の目を楽しませるつくりである。

第673回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切

庭に咲く白紫陽花は夕闇に毬の大きく浮き立ちて見ゆ　大和美由紀

薄闇に浮くように見える紫陽花の美しさ。二～四句〈～の大き毬夕べの闇に〉。

夫婦ともよく病み老ひて八十路越へ人手貸りずに生涯生きぬ　秋吉　嘉範

独立心の強い作者。二句〈病み老いたれど〉四句以下〈人手頼らず生きんと思う〉

二度三度両手をしかと握られて再会を笑むとなりの方と　山本　静子

親しかった隣人との嬉しい再会。三・四句〈握りあい再会よろこぶ〉としては。

たっぷりと真水をたたえ山奥に早苗の植わる深田のありぬ　佐々木和彦

こんな場所に、と田に眼を瞠った作者だろう。三・四句〈山中に早苗のそだつ〉と。

玄海の空燃えつきて沈む陽の何とはなしに涙あふれる　早川　祥三

玄界灘にしずむ夕日にわけもなく感動した作者か。二・三句〈夕映えつきて沈む陽に〉。

掬りてゐるは些細か砂時計昨日と今日の境ひ今越す　豊田ミツ子

些細なことに拘り気持ちの晴れない作者だろう。持て余す感情を時間が表している。

世界遺産にわァなっちゃったひょいひょいとお参りしてゐた中津宮辺津宮　山﨑　公俊

喜びをストレートに詠んで、楽しい。初句・二句〈わぁ世界遺産になっちゃった〉。

剪定を済ませし庭に今日の雨切り口新らし木に注がれり　森　龍子

剪定後の切り口に着目した作者の目が良い。下句〈枝の切り口濡らして注ぐ〉と。

わが顔に化粧の紅を濃く引きて雨に負けぬと車を馳せる　北野カズミ

お化粧の心理的効果の大きさを実感した作者。上の句〈常よりも今日は口紅濃く塗りて〉。

来し方を思えば果てなし宗像の雲白かりし山青かりし　上妻　真次

作者は遠方からの旅人。長い歴史をおもい感慨をもって見た雲と山、対句が効いている。

ほたるの火「し」の字を描き消えゆけり逝きたる友の無念を想う　萩原　勉

友を偲ぶ歌。〈「し」の字描き消えし蛍の灯に想う若く逝きたる友の無念を〉と上下句の関係を強めた。

植え込みに白やピンクの花咲かせサルスベリさん盆連れてくる　本田エリナ

百日紅の花にお盆の支度をと思う作者。やや甘いので下の句〈盆を呼び寄す百日紅は〉。

園児バス待つ三人のひそやかな話聞いてる雨の紫陽花　吉崎美沙子

抒情的な景。三人は親子と思われるので二句〈～母と子の〉とすると景がより鮮明。

お詫びと訂正　葉月（第678号）7ページ記載の宗像大社歌会詠草に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。
（誤）秋吉　嘉　氏　　（正）秋吉　嘉範　氏

◆選者詠

欲しきもの無くともはひる人あらむ光の箱の夜のコンビニ

薄明の海の白さに咲きてをりひと夜流星を見てゐしバジル

第646回　俳句

黒南風をしのぶ葉ずれがなぞる礎　早川　祥三

御造営奉賛者御芳名（平成二十九年七月）（順不同・敬称略）

一〇〇、〇〇〇円
京都市　疋田　聡

五〇、〇〇〇円
伊賀市　長谷川惠子
伊賀市　黒田　巽男
宗像市　安部　健児

三〇、〇〇〇円
春日市　野村　光輝
鞍手郡　白川　照之
鳥取市　谷口　祥司
福岡市　九州賢人会議所
柳川市　中村　一雄

二〇、〇〇〇円
太宰府市　今泉　寛善

一〇、〇〇〇円
愛西市　毎田　優
阿蘇市　永野　博吉
伊賀市　長谷川兼喜
伊賀市　黒田健太郎
伊賀市　黒田　大助
伊賀市　福島　義治
伊賀市　森　裕章
伊賀市　秋森　智也
伊賀市　由美
伊賀市　北村　常美
郡山市　宗像　剛

六、〇〇〇円
大分市　宮崎　淳

五、〇〇〇円
足立区　寺島　和恵
えびの市　和田　春男
大牟田市　前田　真吾
小郡市　國分真由美
加東市　石井　陽子
北九州市　江島　賢一
北九州市　中村　多加
北九州市　樋口　俊文
北九州市　野田　吉隆
熊谷市　内田　豊治
渋谷区　橋本　輝樹
世田谷区　中澤　康生
豊島区　小和田一孝
練馬区　奥　匡人
広島市　門永　拓也
福岡市　松村　剛
横浜市　金山　新吾

三、〇〇〇円
足立区　江藤　和弘
大阪市　福地　昭義
ふじみ野市　榊原　和夫

二、〇〇〇円
荒川区　柏手　葉子
市川市　小野　敦史
磐田市　永井　崇司
大磯町　山田　巧
春日市　矢野セツヨ
川崎市　楢原　隆史
久留米市　島松美代子
静岡市　松田　恵子
下野市　大西　眞世
下野市　大西登喜子
田川郡　和多喜代美
長崎市　吉田　昌樹
名古屋市　田中美奈子
福岡市　川上　美佐
福岡市　入江　隆文
福岡市　伊藤　繁光
福岡市　福田　武美
松山市　村上　俊二
横浜市　古屋　美弥
蕨市　山本多津子

むなかた
長月（ながつき） 第679号
2017年9月1日発行（月刊）／宗像大社 〒811―3505 福岡県宗像市田島2331 電話（0940）62―1311（代） http://www.munakata-taisha.or.jp/

9月 まつりごよみ

1日	総社月次祭 引続き 高宮祭、宗像護国神社祭 風鎮祭	午前11時
15日	総社月次祭 引続き 高宮祭 第二宮・第三宮遷座祭	午前11時 午後8時
16日	第二宮・第三宮遷座奉祝祭	午前10時
23日	秋季皇霊殿遙拝式	午前10時
30日	秋季大祭宵宮祭	午後6時

編集後記

8月中旬から下旬にかけて大島・中津宮勤務に行ってきました▼お盆の帰省シーズンと重なり、ご家族での参拝が多かったです。またここ最近では中津宮でも御朱印を受けられる方が非常に多く御朱印ブームはまだまだ続いていると感じました▼そのことを大島の氏子さんと話していると、ブームの最中御朱印帳が転売され問題となっていることを聞きました▼御朱印は参拝の証であり、御守は神様の御霊が込められ皆様に頒布しております▼神社で授与している授与品… その意味をもう一度見つめていただき、皆様に参拝また御朱印も集めていただきたいと思う。（黒）

宗像大社